

泉鏡花の「高野聖」の文章について (二)

植 村 邦 正

The Characteristics of Expressions in Kyôka's Works (Ⅱ)

Kunimasa UEMURA

ま え が き

前稿において、「文語の混用」「ことばの省略」「特殊なことば」「よく出てくることば」などを取り上げたが、本稿では、敬語表現と感動表現について考えてみようと思う。

〔注〕以下の例文において、各文頭の数字は旺文社文庫本のページ数を示す。

敬語・感動詞・感動助詞の使い方

鏡花のこの作品における語り口調は、いろいろの面から眺めてみるべきであるが、ここでは、その口調を決定づける大きな要素である敬語・感動詞・感動助詞の面から考察してみよう。まず、若干の実例を示せば、……

11 若いの、聞かっしゃい、と言って語り出した。

14 いや、膝だの、女の背中だのといった、いけ年をつかまつった和尚が業体で恐れているが、話が話じゃからそこはよろしく。

19 それでは口でいう念仏にも済まぬと思うてさ。

28 危ないとも思わずにずっとかかる、少しぐらぐらとしたが難なく越した、向こうからまた坂じゃ、今度は上りさ、ご苦労千万。

41 思い出しても悚然とするて。

43 いや、お前さまお手近じゃ、その明りを掻き立ってもらいたい、暗いと怪しからぬ話じゃ、ここらから一番野面で遣つけよう。

44 いつの間にか体はちゃんと拭いてあった。お話し申すもおそれおおいが、はゝはゝはゝ。

48 するとお聞きなさい、婦人は足駄をはきながら手を取ってくれます。

54 空の月のうらを行くと思うあたり遥かに馬子唄が聞こえたて。

56 婦人自身は箸も取らずに二ツの膳を片づけてな。

敬語としては、「聞かっしゃい」「お話し申す」「お聞きなさい」「……ます」など。老人の若い男への語りかけは、江戸の洒落本・滑稽本の用法を模している。それも高飛車な言い方に終始せず、時にやわらかい「お聞きなさい」「手を取ってくれます」などと変化を持たせている。「ご苦労千万」などという言い方は、自分に向かつての呼びかけで、口軽いユーモアを感じさせる。

感動詞としては「いや」という男性用語を多用している。

感動助詞には、「思うてさ」「上りさ」「するて」「聞こえたて」「片付けてな」など老人らしい言い

方の中に親しみを持った、くだけた感じを持たせている。

以下老僧の語りのことばをはじめ、その語りの中に出てくる人物の会話について考えてみようと思う。

(1) 敬語の使い方

① 語りことばの中の敬語

鏡花の作品には登場人物に語らせながら、それに相槌を打つワキ役を出して物語の面白さを増す手法をとったものが多いことは前稿で述べた。敦賀の旅宿で一夜をともにしたワキ役の若い男に配するに、語り手は宗門名譽しゅうもんの説教師せつきょうしで六明寺の大和尚だいおしょうという設定である。しかし、大和尚たるところは微塵も見せず、一介の飄々たる旅僧として語りの中におのずから人柄を覚らせようという趣向である。それは、まず、ことば遣いに気を配るところからはじまる。

イ. 老僧（語り手）→若い男（聞き手）

「11聞かっしやい」「19なぜまたと謂わっしやるか」「13……でござった」「20お聞かせ申す話」などは、老人の古風な言い方で、聞き手の若い男に対し、ある種の威厳を持たせている。しかし、時に、「17申し上げるまでもない」「18問わぬことまで深切に話します」「14お前さま」「13お聞きなさいよ」「22その時膝節ひざふしを痛めましたものと見える」などと、同僚、仲間に話しかけるような親しみのある言い方を交えている。聞き手の若い男は読者の代表でもあるから、このことは自然読者に親しみを持たせ、気取った老人の口調からくる違和感を和らげる効果を見越した手法と考えてよい。

なお、ついでながら、助動詞「しやる」「さしやる」は、「しやる」の前に促音が加わり、「さしやる」は「さ」の次に促音が加わることが多い。「しやる」「さしやる」はそれぞれ「せらる」「させらる」の音転で、「しやる」は五段活用に、「さしやる」「さっしやる」はそれ以外の活用語につく。命令形に「……しやれ」「……しやい」の二通りがある。

ロ. 若い男→老僧

ワキ役の若い男が、直接作品中に顔を出すのは、わずか数回しかない。したがって敬語の面からは、ほとんど捉えることができない。

9 差し支えなくば御僧と御一所に。

これは、最初の会話に出て来る、多少かしこまった、一面、気取った言い方であるが、これなど、日常使い馴れぬことば遣いが、かえって読者にはほえましいユーモアを感じさせる役目を果たしている。これ以外は、「9雪ですよ」とか、「11諸国を行脚あんぎゃくなすったうちのおもしろい談はなしを」など別段とりあげるまでもない言い方をしており、親しみ易い老僧の語り振りにつられて、気軽な敬語しか使われていないところなど、いかにも自然である。

② 登場人物の会話の中の敬語

イ. 修行僧（老僧の若い時代）→登場人物

年若い修行の身であるというところから、誰に対しても、丁寧な折り目正しい敬語を使っている。山で出合った茶屋女に対しても、「13……でござります」「13ありませんか」、同じく百姓に対しても「17存じますが」「17参るのでございましょうな」、山中びとつやの孤屋ひとりやの女主人（魔性の女）に対しても、「31……でございます」「52参りませなんだでございましょうか」「55ご雑作ざうさくを頂きます」「61ご厄介やくかいにあいなりまする」など。

ロ. 茶屋の女→修行僧

13 いんね、川の水でございす。

この「ございす」は「ございます」の転化したものであるが、江戸時代深川の岡場所の女などがよく使った言い方。教養のない田舎女の味を出そうとして用いたものか。敬語とは関係ないが、修行僧の丁寧な問いかけに対し、「そうでねえ」というややぞんざいな言い方をさせているのも同じ意図であろう。

ハ. 百姓 → 修行僧

「17行かっしゃる」「18やってくれさっしゃい」「18行かっしゃれ」「18ござりませぬ」などの言い方は百姓らしい実直な丁寧さと、年輩者であるらしいことを感じさせる。なお、この百姓だけに「がす」という敬語を使わせている。

17とてつもない川さできたでがすよ。

この「がす」は、「ございます」→「ござんす」→「ごあんす」→「がんす」→「がす」という経路でできたもので、簡略になるほど敬意は薄くなる。

18血気にはやって近道をしてはなりましねえぞ。

この「ねえ」は打消の助動詞「ない」の訛ったもの。すなわち、「ましない」→「ましねえ」と転じたのである。

ニ. 親仁のことは

○修行僧に対して

「48帰らっしゃったの」「68歩行かっしゃりゃ」「69見さしつたろう」「69来さっしゃる」「69思わっしゃるの」「11・69聞かっしゃい」「75措かっしゃい」「50助けてもらわっしゃい」「73いわしつた」「69見さっせい」「68休んでいさっしゃる」「74迎えにござつた」

これらは大体老僧の語りの中の敬語の使い方と同じであるが、「さしつた」「さっせい」など多少変化を持たせている。親仁に老僧と同じような言葉遣いをさせているのは、老人というだけでなく、魔性の女の下僕ながら、女に一目置かせるほどのなかなかの人物であることを示唆している。

ついでながら、「歩行かっしゃりゃ」の「りゃ」は「れば」の音転、「見さしつたろう」「いわしつた」の「しつた」は「しゃつた」の転、「見さっせい」は「見さっしゃい」の転じたものである。

○魔性の女（親仁の女主人）に対して

「35落っこちさっしゃるな」「48行って見さっしゃい」「36早くいってござらさせえ」「49馬市へ出しやす」「49行きやす」「49参りやすする」

修行僧に対する敬語と同じであるが、ただ「やす」という語は、この女にだけ使わせて変化を出している。「やす」は「ます」よりやや卑俗な言い方。終止形に「やする」を用いているが、これは江戸語に多い。

49いんえ御懇には及びましねえ。

「御懇」は「ご挨拶」の意。「ましねえ」は上述18の百姓のことはと同じ用法。

ホ. 魔性の女のことは

○修行僧に対して

「33よろしゅうございましょう」「33おくつろぎなさいまし」「41大変でございますこと」「56貴僧、さぞお疲労、すぐにお休ませ申しましょうか」などは、いかにも女らしい丁寧な、れっきとした敬語。ところが初対面のときには、「31何か用でござんすかい」とやや敬意をおとした表現をしたり、「33お暑うござんしたでしょう」と親しみをこめて言ったりしている。このこと

は、「ござんすかい」の「かい」などの感動助詞の使い方で一層はっきりしてくるので、そのところで述べることにする。なお、「58復りませなんだ」の「ませなんだ」という言い方は、上述の「ましねえ」の過去形、「ましなんだ」とともに江戸語に多い。

○親仁に対して

「49ご苦勞でござんす」「35おじ様、どうでござんした」「35お頼み申しますよ」「36私が帰るまでそこに休んでおくれでないか」などをみてもわかるように、単なる下僕に対する言い方としては丁寧過ぎる。しかし年長であり、頼り甲斐のある一端の人物であるので、親しみのある言い方の中に敬意のこもった表現をしている。

○白痴の男（女の亭主）に対して

「59一ツお聞かせなさいましなね」と、人目を憚り体裁を作っているかと思うと、食時のとき、言うことを聞かぬと見てとるや、「54なんでございますね、あとでお食んなさい、お客さまじゃありませんか」と高飛車に出る。さらには敬語を使わず、「55厭かい、これでは悪いのかい」とぞんざいな言い方になる。敬語の使い方での女の気持の変化や、周囲への気の配り方がよく分かる。

(2) 感動詞の使い方

感動詞は、話し手の感情・呼びかけ・応答などの意志を表現するものである。これらは名詞・代名詞・連体詞・副詞・助詞などから転成したものも多く、実際の場合では本来の意味をあわせ持つものもあり、また感動詞は本来が未分化のもので、感情・呼びかけ・応答などをあらかず語に分類するとしても、判然としないものも多い。

感動をあらわすものはあまり問題がないが、呼びかけをあらわす語については、ここでは範囲を広めて、相手へ呼びかける語は勿論、自分へ呼びかけたり、相手の注意を促したり、せきたてたり、同意を求めたり、あるいは掛け声をかけたりするものをも含めて考える。また応答をあらわすものについては、相手のことばに対し肯定・応諾を示す一番丁寧な言い方は「はい」で、これは修行僧、魔性の女、百姓に使わせ、次に「ええ」は修行僧に使わせている。相手のことばに対し、否定・拒絶を示す一番丁寧な言い方は「いいえ」で、これは魔性の女に、また「いえ」は修行僧に専ら使わせている。これらは別に問題にならないので、ここでは取りあげないことにする。

① 老僧のことば

感情をあらわすものとしては、……

62ほほう、この若狭の商人はどこへか泊ったとみえる、……。

20いやもう生得だ嫌いだ……。……。

25ともはや顔のあたりがむずむずして来た、……。

13はて面妖なと思った。

56はてさて迷惑な、……。

67ああその刀をもってなぜ救わぬ、ままよ！

25やあ、乳の下へ潜んで帯の間にも一疋、……。

62は感嘆、20はおどろき、25は「なんともはや」の上略されたものが感動詞化したもので、おどろき、困惑する気持をあらわす。13・56はあやしみ困惑する気持。67の「ああ」は感嘆、「ままよ！」は施す方法もなく成り行きに任せるとき用いる。「なんとでもなれ」の意。25の「やあ」はおどろきあきれる気持。

呼びかけをあらわすものとしては、……

44 なんと驚くまいことか。

46 なんと猿じゃあるまいか。

26 するとなんと？ この時は目に見えて、上から……雨が降りかかってきたではないか。

これらの「なんと」の中にはまだ副詞としての用法が感じられるものもあるが、大体相手の同意を期待しつつ呼びかけているもので、「どうだな」というほどの意。

51 うむと総身^{そうみ}に力を入れた。途端^{とたん}にどうじゃい。

これは「どう」という副詞に「じゃ」という断定の助動詞、それに「い」という感動助詞のついてできた連語であるが、それが感動詞的に用いられている。「どうだよく見なさい」というほどの意。

34 縁から立つ時ちよいと見ると、それ例^{れい}の白痴^{ばか}殿^{だん}じゃ。

この「それ」は相手の注意を促すもの。

応答をあらわすものとしては、……

22 何やっぱり道はおんなじで聞いたにも見たのにも変わりはない。

28 なんの渡りかけて壊れたらそれなりけり。

22は普通、相手のことばに対し軽く否定する語であるが、ここは自分の心に思ったことを否定したもの。即ち山の中の道があまりにひどいので、道を間違えたかと錯覚したことに対し「何」と否定したのである。28は自分でまず危ない橋だと気遣ったが、次の瞬間それに対し反語的に少しも気にしない意を「なんの」によってあらわした。

37 何、いけませんければ跣足^{はだし}になります分のこと、……。

60 唯、なあに、変わったことでもござりませぬ、……。

この二例は、老僧の語りの中に登場する自己の修行僧時代の会話に出て来ることば。これは相手の女のことばに対し、軽く否定する気持をあらわしたものの。

② 魔性の女のことば

感情をあらわすものとしては、……

33 雑巾^{ぞうきん}をお貸しくださいまし。ああ、それからもしそのお雑巾ついでに……。

33 さぞまあ、お暑うござんしたでしょう……。

60 おや、貴僧^{あなた}、どうかなさいましたか。

61 おやおやさっきの騒ぎで櫛^{くし}を落としたそうな。

58 おお、よくしたのねえ。

33の「ああ」はあることを思いついて思わず発する語。「さぞまあ」は相手のことばに同情し、おどろく意。60・61・58はおどろき、感嘆の意。

40 あ森から三里ばかり傍道^{わきみち}へ入りました処に大滝があるのでございます。それはそれは日本一だそうですが、……。

これは驚きと感動をあらわす。

37 あれ、嬢^{ぢやう}さまですって、……。

38 あれ、気味がわるいよ。あれ、いけませんよ。

40 あれ、貴僧^{あなた}、そんな行儀^{ぎやうぎ}のいいことをしていらっしゃってはお召^{めし}が濡^ぬれます。

41 あれさ、じっとして。

48 あれさ、ちゃんということを肯^きくんですよ。

37は年増の妻君である女が、修行僧から「嬢さん」と呼ばれたことの意外さに対し、「あれ」と驚き、きまり悪がったのであり、38の前者は突然叢から墓が出たのに対する驚き、後者は墓にまつわりつかれ、驚くとともにたしなめる気持を示したもの。40は僧の余りの堅苦しい行儀よさに驚いた気持。41・48は38の後者と同意。「あれ」「あれさ」はこの女のことばの中だけに使用している。

呼びかけをあらわすものとしては、……

33 さあ、それではご案内しましょう、どれ、ちょうど私も米を磨ぎに参ります。

33 さあさあ汚のうございですが早くこちらへ……。

41 それ、それ、お法衣の袖が浸るではありませんか。

33の「さあ」「さあさあ」は相手をせき立てる語、「どれ」は自分への呼びかけと考えられる。41の「それ、それ」は相手の注意を促す語。

応答をあらわすものとしては、……

52 ああ、そう、と会心の笑をもらして婦人は蘆毛の方を見た、……。

33 そう、汗におなりなさいました、……。

50 (親仁) ちょっくら行って参りますよ。(女) あい。

55 (修行僧) 飛んだご雑作を頂きます。(女) 否、なんの貴僧。お前さん後程に私と一所にお食べなさればいいのに。

52・33の「ああ」「そう」はともに軽い肯定の返答。

50の「あい」は女性用語。55の「なんの」は修行僧が、「飛んだご雑作を頂きます」というのに対し、女が反語的に否定したもの。

③ 親仁のことば

感情をあらわすものとしては、……

75 はて、措かっしゃい。

これは親仁のことばであるが、相手に考え直したがよいと訴える気持のところ。

呼びかけをあらわすものとしては、……

69 なんと、おらがひいていった馬を見さしたろう。

これは老僧の使用語と同じ意。

69 それ見させい、あの助平野郎、とうに馬になって、それ馬市で銭になって、銭がそうらこの鯉に化けた。

「それ」「そうら」は相手の注意を促す言い方。使用語は老僧と同じような語が多い。

応答をあらわすものとしては、……

49 おお、諏訪の湖のあたりまで馬市へ出しやすのじゃ、……。

49 いんえ御懇には及びましねえ。

48 何さ、行って見さっしゃい御亭主は無事じゃ、……。

68 うんにゃ、秘さっしゃるな、……。

49の「おお」は肯定の返事。「いんえ」は「いいえ」よりやや俗な言い方。普通「いんえ」は女性語として用いることが多いが、ここでは親仁に使わせている。坪内逍遙の「当世書生気質」、木下杢太郎の戯曲「和泉屋染物店」、川端康成の「十六才の日記」などには女性のことばとして使っている。48は37・60とと同じ用法。68は否定の意のぞんざいな言い方。

④ 薬売その他の人物のことば

感情をあらわすものとしては、……

8 やあ、人参と干瓢^{かんひょう}ばかりだ。

62 おお、積った、積った。

8 は老僧と同宿した若い男のおどろきと感嘆のことば。62は宿の主人が雪の降り積ったのに対する驚嘆の叫び声である。

呼びかけをあらわすものとしては、……

13 これや、法界坊。

薬売の男が修行僧の宗朝を見くだした呼びかけ。「法界坊」は歌舞伎「隅田川続碇^{すみ だ がわ こじのれも かげ}」の主人公で、うす汚ない好色の悪僧で、この男に修行僧を見たててからかった。

14 おい、それだっても無銭^{むせん}じゃねえよ。

16 おいおい、松本へ出る路はこっちだよ。

14・16は、ぞんざいな呼びかけ。これらはみな薬売の男が、若い修行僧をばかにした言い方。

16 どッこいしょ、と暢気なかけ声で、その流れの石の上をとびとび伝ってきたのは天秤棒を片手であついだ百姓じゃ。

73 やれ泣くでねえぞ、……。

16は力を入れるときのかけ声だが、これは百姓の自分への呼びかけと考えられる。73は白痴の男の少年時代、病気であったとき、父親が彼に呼びかけたものである。

応答をあらわすものとしては、……

14 何、遠慮をしねえで浴びるほどやんなせえ、……。

修行僧が生水を飲むのを気遣うことばに対し、薬売の男が構わぬから飲めといってすすめるところ。

72 ねえねえ、というて山へ帰った。

「ねえ」は「ねい」が、「ねい」は「ない」が訛ったもの。「ない」「ねい」はともに江戸時代武家の下男などが、主人に対して用いた。それを朴訥な田舎の百姓（白痴の男の父親）のことばにふさわしいとして作者が取り上げたものであろう。「ない」は、「はい」の意。

13 いんね、川のでございす。

これは茶屋の女のことば。「いいえ」より俗な言い方。

55 うむ、いや、いや、と肩腹を揺ったが、べそを搔いて泣き出しそう。

白痴の男が女から叱られ、一旦は応諾したが、すぐにそれを「いや」と否定するところ。

63 うむ、といって長く呼吸^{いき}を引いて一声、うなされたのは婦人^{おんな}じゃ。

この「うむ」は55と違って女のうめき声である。

⑤ その他の感動詞

イ。「あの」「その」「こう」

33 あの、この裏の崖を下りますと、……。

57 もっともあのこれから冬になりまして、……。

59 それでもあの、謡^{うた}が唄えますわ。

これらの「あの」は、話がすらすら出来ない時のつなぎのことばで、魔性の女だけが使っている。

48 私はそのさっきからなんとなくこの婦人^{おんな}に畏敬の念が生じて……。

これも「あの」と同じつなぎことばであるが、これは老僧が使っている。

54 白痴は……崩れたように胡坐^{あぐら}して、しきりにこう我が膳^{うが}を視めて指さしをした。

47 やがてまた例の丸太を渡るのじゃが、……^{きじ}木^じ地^じがこうちょうど鱗のようで、……。

48 乗るとこうぐらぐらして柔らかにずるずるとはいそうじゃから、……。

「こう」は元来副詞の「^か斯く」の音便形であるが、それをつなぎのことばに用いた。しかし、これは「あの」「その」より以上に、原義を残存している。「こう」はみな老僧のことばの中に用いられている。

ロ. 名詞より転成した語

50 畜生、といったが馬が出ないわ。

51 畜生俗縁があるだッぺいわさ。

この二例は親仁のことば。これは例の薬売の男が女のために変生させられた馬をののしる罵声。男性用語であるから、結びの「わ」「わさ」は下降調に発音されなければならない。

45 畜生、お客さまが見えないかい。

これも、もと人間であったが、女のために変生させられた猿に対する呼びかけと、怒りと、蔑視の感情を表現している。人前で貴婦人を装う女が、はしなくも魔性をさらけ出した表現と見るべきである。

30 南無三宝、この白い首には鱗が生えて、体は床をはって尾をずるずると引いて出ようと、またすきった。

これは老僧のことば。山中で突然絶世の美女（実は魔性の女）に遭い、恐怖を感じたとき思わず発した語。「しまった、さあ大変だ」くらいの意。

ハ. 感嘆と否定の「いや」

「いや」には語源の相違から、否定の意味と感嘆の意味との二つがある。これは謡曲・狂言・浄瑠璃・洒落本・滑稽本などの会話に多出する。鏡花がこれらの作品の愛好者であるところから、自然多く取り入れたかとも考えられる。この作品中全体で十九か所出てくるが、老僧（修行僧時代の会話語一を含む）に十七、親仁に二使わせている。この語は男性用語で、同僚以下の者に対する会話に多く用いられる。

○相手のことばを打消したり、また不同意をあらわす場合——

69 上人はうなづきながらつぶやいて、いや、まず聞かっしやい、……。

聞き手の若い男が話のつづきをせき立てるのを老僧が遮って言うところ。

○前言とか前の考え・行動などを打消し、さらにそこへ何かを付け加えたり、改めて言い出したりする場合。——

18 先は一つで七里ばかり^{そうたい}総体近うござりますが、いや今時往来のできるのじゃあござりませぬ。この一例のみは、老僧の修行僧時代の会話の中に出て来るもの。

19 今申したようではずっともう悟ったようじゃが、いやなかなかの臆病者、……。

20 歩行くにはこの方が心細い、……。それを覚悟のことで、足は相応に達者、いや屈せずに進んだ、進んだ。

21 あッというて飛び退いたが、それも隠れた。三度目に会ったの（蛇のこと）が、いや急には動かず、……。

27 はるかに一輪のかすれた月を拝んだのは、^{ひる}蛭の林の出口なので。いや蒼空の下へ出た時には、なんのことも忘れて、……。

46 今の悪戯、いや、毎々、^{ひき}墓と^{こうもり}蝙蝠と、お猿で三度じゃ。

46 おずおず控えていたが、いや案ずるより産が安い。

48 御亭主は無事じゃ、いやなかなか私の手には口説き落とされなんだ。

これは親仁のことは。前に婦人と親仁の会話があり、留守の間に「お前さんの亭主を盗むぞよ」というふざけた場面がある。

54 わかめの茹でたの、塩漬の名も知らぬ茸の味噌汁、いやなかなか人参と干瓢どころではござらぬ。

76 耳が動く、足がのびる、たちまち形が変わるばかりじゃ。いや、やがて、この鯉を料理して大胡坐で飲む時の魔神の姿が見せたいな。

これは親仁のことは。

○感嘆の意をあらわす場合――

13 ちょいと見ると、いやどれもこれも克明で、分別のありそうな顔をして。

今まで知らなかったことに気付き、オヤと軽く感心する。

14 いや、膝だの、女の背中だのといって、いけ年をつかまつた和尚が業体で恐れ入るが、……。得意気に色気話をしていたが、和尚の身であることに気付き、てれくささ、はずかしさを感じたという気振をみせる。

43 上人はちょっと句切って、「いや、お前さまお手近じゃ、その明りを掻き立ててもらいたい、……。」

上人（老僧）がうす暗さに気付き、近くにいる若い男に呼びかけたもの。

12 若狭の者で塗物の旅商人。いやこの男なぞは若いが感心に実体な好い男。

26 昼もなお暗い大木が切々に一ツツ蛭になってしまうに相違ないと、いや、まったくのことで。

30 私は驚いた、こっちの生命に別条はないが、先方さまの形相。いや、大別条。

63 小刻に駆けてくるのは二本足に草鞋をはいた獣と思われた。いやさまさまにむらむらと家のぐるりを取り巻いたようで、……。

以上の四例はみな、驚き、感動の表現である。「ああ」「まあ」などの意。

(3) 感動助詞の使い方

ここで感動助詞というとは、いわゆる終助詞・間投助詞を合わせたもので、話し手の命令、希望、感動などをあらわし、また語勢を添えたりするものである。ここで老僧、親仁の使う感動助詞は、江戸時代後期の洒落本・滑稽本における老人の用語に基礎をおいていることは上述の敬語・感動詞と同じである。

① 老僧のことは

8 お泊りはどちらじゃな。

15 それこそ四抱、そうさな、五抱もあろうという……。

20 いやもう生得だい嫌い、嫌いというより恐怖いのでな。

56 自分は箸も取らずに二ツの膳を片付けてな。

63 私はその方を枕にしていたのじゃから、つまり枕頭の戸外じゃな。

これらは敬体と共存しない「な」であって、男の老人がうちとけた会話に多く用いる。あまり上品ではない。

12 お前さまと同国じゃの。

13 きまりも悪し、もじもじと聞くとの。

この「の」は「な」よりやや丁寧な言い方。これも老人が多く用いる。女性の用いる「の」とは

イントネーションが違う。

15と見ると、どうしたことかさ、今いうその詮じゃが、……中空へ虹のように突き出ている。

19それでは口でいう念仏にも済まぬと思うてさ。

48それがさ、一件じゃから耐らぬて、……。

28今度は上りさ、ご苦労千万。

「さ」は軽く念を押し、指示し、言い放す場合に用いる。やや品の悪いことば。

12その茶屋までのしたのじゃが、朝晴でじりじりと暑いわ。

21黄色な汁が流れてびくびくと動いたわ。

28竹の杖を肩にかついで、すたこら遁げたわ。

13天窓から嘗めていら。

15さてよく見ると子細があるわい。

61よたよたと体を持ち扱うわい。

「わ」「わい」は、驚きとか感動の気持ちをあらわす、老人の会話語。男性の場合は下降調に発音する。13の「いら」は、「いるは」→「いら」となったもので、下品な言い方。

56ふっふつと大儀そうに呼吸を向こうへ吐くわさ。

この「わさ」となるとややあらい言い方になる。これは江戸語に多く、それ以後あまり使われていない。

14顔を見合わせて二人が阿々と笑ったい。

20景色も奇跡もあるものかい、……目じろぎもしないですたすと捏ねて上る。

51途端にどうじゃい。俗縁とは驚いたい。

「い」は、うちとけた会話に、念を押ししたり、語勢を強めたりする、男のぞんざいなおい方。

20の「ものかい」は、「ものか」という反語の意味を持つ助詞を強めたもの。

20はっと息を引いて膝を折ってすわったて。

34まずおそろしく調子がいいじゃて。

68また一通りの笑い方ではないて。

この「て」は、軽く言い張るときなどに用いる。現在東京語でも用いている。

46件の動物の天窓を振り返りざまにくらわしたで。

47松の木は虻に似ているで。

「で」は、品のわるい、物事を断定するときに用いる語。

56しばらくしょんぼりしていたつけ。

71件の蜂のを見つけたつけ。

「つけ」は、過去・断定の助動詞で終わる文について回想をあらわす。

② 親仁のことば

35さればさの、頓馬で間の抜けたというのはあのことかい。

48何さ、行って見さっしゃい御亭主は無事じゃ、……。

51畜生俗縁があるだっぺいわさ。

「さ」の使用は老僧よりも多い。このことは老僧より雑な言い方をしていることになる。51の「あるだっぺいわさ」の「だっぺい」は、「であるべし」の変化したもので、「だろう」の意。江戸語では「だんべい」「だんべえ」ともいう。現在関東・東北地方の方言に「だっぺい」「だっぺ」「だんべ」「だべ」「だべい」という言い方がある。なお、ついでながら、「35お嬢さまどこさ行かつ

しゃる」の「さ」は「へ」に当たる格助詞で、中世以降の用法。

36 いいとものといいかけて、……。

48 御坊さま旧もとの体で帰らっしゃったの。

68 なんじゃの。己おれが嬢お嬢さまに念がかって煩惱が起きたのじゃの。

「の」も老僧より多く使われている。

51 なんでもはじめからそこな御坊さまに目をつけたつけよ、……。

36 留守におらがこの亭主を盗むぞよ。

75 眉を開けば風も吹くぞよ。

36 は女が修行僧と水浴に行って浮気をするかも知れないのをからかって言ったところ。75 は女の神通力を修行僧に話すところである。「ぞ」は相手に念を押すときに用いる。「ぞよ」は年輩者が人をさとすときなどに用いる古い言い方。

③ 魔性の女のことば

イ. 修行僧に対して

61 ごゆっくりなさいましな。

41 大変でございますこと。

57 貴僧あんた、それでもお眠ければご遠慮なさいますなえ。

42 馬でも牛でも吸い殺すのでございますもの。

以上は親しみのなかに品のよい女らしさを含んだ言い方。敬体の文につく「な」は、男の老人の使う常体の文の中に出て来る「な」とは違い上品である。57の「え」は親しみをあらわす感動助詞で、「な」は禁止の助詞である。

31 何か用でござんすかい。

50 お遁にげ遊つろばすお意ではないかい。

33 お洗足せんそくを上げましょうかえ。

37 あれ、嬢お嬢さまですって、とやや調子を高めて、艶麗あでやかに笑った。

この「かい」「かえ」「って」はさらに打ち解けた言い方で、普通目上の人には用いない。

ロ. 白痴の男に対して

59 さあお客さまに一つお聞かせなさいましなね。

これなど男に対する敬意の表現というより、他の聞き手を意識し体裁をとりつくろったところである。ところが気の向かないときには一切敬語を使わず、心理の動きをこの方面からも示している。

55 厭いやかい、これでは悪いのかい。

51 世話世話が焼けることねえ、婦人は投げるようにいって……。

④ 薬売の男のことば

富山の薬売が山中で若い修行僧に悪態をつくところでは、作者はこの薬売にできるだけ憎々しいことばを使わせ、後で魔性の女に馬に化せられるときの効果をねらっている。

14 すっぺら坊主になってやっぱり生命いのちは欲しいのかね、……。

「すっぺら坊主」は近世語の「すっぺらぼん」から出たことばか。「すっぺらぼん」は、「すっからかん」「からっぽ」の意であるから、何にも持たぬ、したがって何も惜しくないはずの坊主とでもいう意味で、僧に対する蔑称とでもいうのだろうか。

14 何、遠慮をしねえで浴びるほどやんなせえ。

14 生命^{いのち}が危くなりゃ、薬をやらあ、そのために私がついてるんだぜ、…….

16 ぼんやりしてると、木精^{こねま}がさらうぜ.

14 争われねえもんだ.

「やんなせえ」は「やりなさい」の、「やらあ」は「やるは」の音転。「ぜ」「もんだ」は人を見下した不作法ないい方.

—— 未 完 ——